

実は私、  
中大出身で

Vol.3

奥村組代表取締役社長  
**奥村太加典氏**

1986年  
理工学部  
卒



進路や人生…

迷ったり、つまずいたり当たり前

**自分の道**を見つけ、  
自信をもって**歩んでいこう**



インタビュー動画は  
こちらから  
ご覧になれます



「実は私、中大出身で」の第3回では、総合建設会社「株式会社奥村組」代表取締役社長の奥村太加典氏（1986年理工学部卒）に、後樂園キャンパスで学んだ在学中の記憶や、創業家出身の社長として取り組んできた仕事などについて話を伺った。中大卒業を翌年に控え、将来の進路に悩んでいた奥村氏は、北海道の牧場で汗を流した体験が骨身にしみ、「人生にパラダイス（楽園）はない」と気づいたという。この経験が人生の大きな転機となり、建設業の道を歩むと決心した。

（聞き手「HAKUMON Chuo」学生記者、荒田智海＝文学部3年、九十歩胡春＝文学部3年）  
（映像撮影 中央大学広報室・中央大学放送研究会学生スタッフ）

《奥村組は1907（明治40）年、当時27歳の奥村太平氏が、奈良の地で創業した。創業家の5代目社長である奥村太加典氏は、高校卒業時に「自立したい。親から離れたい」と、東京の大学への進学を目指した。幼い頃から土木への興味、建設現場の仕事に対する憧れがあり、その思いが中央大学理工学部土木工学科（現都市環境学科）に進む道を照らしたといえる》

### 土木への興味、建設現場の仕事への憧れ コンクリート工学、水理学…単位取得に苦心

——奈良県のご出身で東京の大学、中でも中央大学に進学された理由を教えてください

**奥村太加典氏** 奈良の自宅から出て親から離れたかったんです。そのためには、やはり東京に出るとというのが一番確度の高い方法だろうと。関西の大学だと自宅から通いなさいと言われたらダメですから（笑）。東京なら通えとは言われないでしょう。それで東京の大学の入学試験をいくつか受けて、中央大学に合格できたということです。

——中大の受験で土木工学科を選んだのは、創業家の仕事との関係性からですか

**奥村氏** そうですね。幼い頃から自宅に奥村組の社員がよく出入りしていて、作業服姿の人もいました。近くにあった奥村組の建設現場を見学したこともあって、土木への興味であるとか、建設現場の仕事に対する憧れのような気持



北海道十勝平野の牧場で働いていた頃。右は様子を見に訪れた姉の珠己さん

ちを持つようになりました。高校1年生のとき、自分に適した職業を判定してくれる進路適性試験では、土木・建築の分野に向くという結果も得ていました。建築という選択肢もありましたが、建築はさっさっさーっとビルの外観などを描いたりできるデッサンの能力が必要です。ただ、私は絵が下手なので…(笑い)、デッサンがない土木を選びました。

——中大で学んだこと、学生生活の思い出などを教えてください

**奥村氏** 土木工学科の専門科目は本当に面白いと思いが



中大時代、友人とたびたびスキーに出かけたという(左から2人目が奥村氏)

ら取り組んでいました。研究室では、土の性状や、土を土木の材料として扱う際にこういった特性を考慮する必要があるかを研究していました。当時の土木工学科は厳しい先生が多く、専門の必修科目(の単位)がやすやすとは取れない。そういう科目がたくさんありました。コンクリート工学や水理学などは、私も1年目では単位を取得できず、2年かけて取得した、そんな思い出があります。学業以外では結構、友人たちとお酒を飲んだ記憶がありますね。値段の安い250ミリリットル入りのウイスキーボトルを毎日1本空けることを日課にしていた時期もありました。そんな目標は立て

なくてもいいのに(笑い)。でも、一つの息抜きではありました。冬になると、友人たちと長野県の奥志賀高原などにスキーに出かけました。学外での一番の楽しみでしたね。今はスキー仲間とはなかなか会う機会がないのですが、ほかの仲間とは時々集まって、お酒を飲みながらいろいろな話をして、学生時代に戻ったように楽しんでいます。

**《奥村氏は「少し中途半端な学生生活だった」とも、中大時代を回想した。卒業して奥村組に入社し、土木の道を歩んでいくことに少しためらう気持ちがあった。昼間は大自然の中で体を動かして、夜はぐっすり眠る。楽しく暮らす中で利益も生まれて生活が成り立つ。卒業の前年、北海道の牧場にそんなパラダイスのような世界を思い描き、実際に働いてみた。しかし、現実とはさまざまな意味で非常に厳しかった。ただ、その体験が進路の迷いをなくしてくれた》**

## 「迷い道」歩いた中大時代 牧場での経験が転機、土木の道へ

——卒業を控えて北海道の牧場で働いたことが転機になったと伺いました

**奥村氏** 私は少し中途半端な学生時代を過ごしたと思います。学業にはもちろん熱心に取り組みましたが、3、4年生くらいから、ちょっと「迷い道」に入ってしまった。将来どの方向に進むべきか本当に迷いました。1年間留年したのですが、幸いにして5年目は卒業単位の心配はなく、いろいろなことにチャレンジする時間的余裕ができました。母親の影響で昔から見ていた西部劇の世界が好きで、馬に乗って広い荒野を駆けながら牛を追いかける毎日に憧れがあったので、北海道の牧場で働けないだろうか。すると



北海道の牧場にある畑で、石拾い作業中の奥村氏

姉が、北海道の牧場に嫁いだ高校の先輩に、牧場を紹介してほしいとお願いする手紙を書いてくれて、その先輩が「ならば、うちに来なさい」と面倒を見てくださることになりました。

—— どれくらいの期間、働いたのですか

**奥村氏** 4月から8月のお盆前までの4カ月間です。4月に行ったら、まだ農作業が無理なほど大地は凍っていました。家族経営の牧場で、牛舎につないで飼っている牛と、囲いの中で放し飼いにしている牛が合わせて約100頭。黒毛和牛と一部は牡のホルスタインでした。仕事はまず牛の餌やりです。高さ5メートルくらいまで伸びるトウモロコシの茎、葉、小さな実まで全部粉碎したものを、サイロ（円筒形の貯蔵庫）に放り込んで乳酸発酵させるんです。これが栄養価が高く消化吸収もよいサイレージという家畜飼料になるんです。サイロの中でサイレージを大きなフォークで落とす作業では、発酵した匂いでふらつきそうになることもありました。毎朝6時起きでこうした作業と、ホイルローダーで糞尿で湿った牛の寝糞の入れ替えなどを行いました。休みは月に一日だけ。髪も伸びますから、牧場の車を借りて10キロ離れた駅前の町まで行って、まずは床屋さんです。あとは不足していた下着を小さな衣料品店で調達したりで、あまり休息する暇はありませんでした。牛を引っ張ったり、サイレージを落としたりするのは結構な重労働だったので、身体は鍛えられてムキムキになりました（笑）。小豆や大豆も作っていたから、牛の世話が終われば畑にも出ていました。

私は卒業して土木の道に進むことにちょっと迷いがあって、北海道にはパラダイスがあって夢のような生活ができるのではないかと期待に胸を躍らせながら行ったんです。ところが、現実には牧場の生活も経営も非常に厳しい。大変な仕

事をされているということを目の当たりにし、自分自身も体験して、「この世にパラダイスなんてないんだ」と実感しました。土木の道を歩もうと、そこで決心したんです。

—— 当初から4カ月という条件だったのですか

**奥村氏** 牧場の主人は、何でも一回手本を見せたら「太加典、あとはやっておいて」というタイプの人で、いろいろなことをやらせていただきました。トラクターの操作、餌やりのミキサー操作などは結構難しい。「そんなの、できへんわ」と思うんだけど、最初のうちは失敗しながらも、だんだんできるようになってきたときの喜びを今でも覚えています。当初から期限はなくて、私が牧場になじんで奈良に帰ってこないものだから、親がこれはまずいと思ったのか、「祖父の法事には出席しなさい」ということで呼び戻されました。4カ月でさまざまな経験ができ、パラダイスはないとわかったけれども、もう少し居たかった。やりがいがありました。

**《奥村組は「堅実経営」「誠実施工」を経営理念に掲げる。1986年に日本初の実用免震ビルを建設した免震のパイオニアであり、トンネルを掘削するシールド工事にも強みを持つ。大阪のシンボル、通天閣（2代目）の施工（1955年）、海上に浮かぶ東京湾アクアラインの人工島「海ほたる」の建設（1995年）にも携わった。近年、奥村社長のトップダウンにより同業他社に先駆けて積極的な広報活動を展開。今や“攻めの広報”は奥村組の代名詞となっている》**

## トンネルの貫通・到達が喜び 「堅実経営」「誠実施工」を貫く

—— 39歳で社長に就任されましたが、それ以前の若手時代を含めて、仕事上の喜び、やりがいを感じたこと、または苦労した経験を教えてください

**奥村氏** 若手のころは建設現場勤務でしたので、工事が日々進捗することにやりがいを感じていました。中でも山岳トンネル工事で硬い地層や岩を掘り抜いた貫通の瞬間、シールドトンネルの場合は終点まで行き着いた到達の瞬間の喜びや達成感は格別です。営業職だったときは大型工事が受注できれば、それが喜びでしたし、社長の立場なら各年度の業績が安定することが喜びです。印象に残っているのは、特に若手の頃に経験した現場での日々です。大学で土木を学んできましたが、現場で通用する部分もある一方、現場で一から学ばないとできないものもたくさんあった。そういう意味でも印象深いですね。

—— 2027年2月に創業120周年を迎えられます。長期にわたって事業を続けられた要因は何でしょうか

**奥村氏** 奥村組は経営理念にうたっている「堅実経営」「誠実施工」という2つを創業者 奥村太平の時代から今日まで大切にしてきました。建設会社がお客さまに納める建物や土木構造物などは、それから何十年と使われます。長く

使われるものを造った会社がなくなったり、経営が揺らいだりしてアフターフォローができないというようなことになっては社会に申し訳ない。持続可能なしっかりとした会社にしなないといけないという意味の堅実経営。それと、建設会社には、多くの方が安心、安全に住んだり、使ったりできる建物・構造物を造る使命がある。だからこそ誠実施工。いずれも欠かせないものです。この2つを大切にしてきたから120年があると思います。

## お笑いの“大阪本社組” CMにもクスッと笑える要素を

——俳優の森川葵さんが建設女子を演じるCM「奥村くみシリーズ」(2018年放映開始)や、米メジャーリーグ野球の吉田正尚選手を起用したCMも話題になりました。攻めの広報を進めるきっかけや、その理由を教えてください

**奥村氏** かつて建設会社の広報は各社とも、事故などのトラブルの際にマスコミ対応をする、いわゆる“守りの広報”がメインで、当社もそうでした。特に知名度は必要ないと考えられていたんですね。ところが、中部エリアの民間工事のコンペで、見積もり金額では奥村組の方が安かったのに、名の知れた東京の会社に発注されてしまい、大変悔しい思いをしたことがありました。このときに知名度の低さはマイナス要因になるのだと認識しました。それと、日本初の実用免震ビルである奥村組技術研究所(茨城県つくば市)管理棟の竣工30年目に、その免震ゴム(建物を地盤から切り離し、地震の揺れを吸収するなどして建物の変位・変形を小さくする装置)の正常な作動を確認する実験を行うにあたって、広告代理店にマスコミなどへの広報を任せるところ、想像以上の反響がありました。コンペでの悔しさと、広報のやり方次第では大きな効果が得られるとわかったことから、攻めの広報に打って出ることを決断しました。その後、2018年に「大阪国際女子マラソン」への協賛を決め、その中継番組内で流すために初めて制作したCMが「奥村くみシリーズ」なんです。この頃、既にCMを制作している

ゼネコンがあったのですが、企業イメージの向上を狙った、きれいなCMという印象でした。これらと同じ路線では奥村組のCMは埋没してしまうと思って、お笑いの本場の大阪に本社がある会社として、クスッと笑える要素をCMに盛り込むよう指示しました。

《CMのコンセプトを決めていく過程で、実は広告代理店から「奥村くみシリーズ」とは別の一案も示されていた。「片時も建設のことが頭から離れない」というやる気満々の熱血社員を描いたシリーズで、奥村氏は胸の内ではこちらを推していた。しかし、女性や若手社員も参加したプレゼンテーションで圧倒的に支持されたのは「奥村くみシリーズ」だった》

——初めてCM制作する際に、広告代理店から示された「奥村くみ」とは別案を支持されていたそうですね

**奥村氏** 8年以上前の話になりますが、CMについて広告代理店から2つの案が提示されました。一つは新人の建築係、奥村くみがちょっとずつこけながらも成長していく様子を描いた内容、もう一つは、たとえばお酒の席でもすぐに建設の仕事の話をするし、パートナーとデート中でも建物の話ばかりしてしまう建設が本当に大好きな熱血社員を描く内容でした。社長の私としては、建設が大好きな社員が大勢いたらうれしいですから、こちら(後者)を推していました。幹部社員のほか、若手や女性社員にも審査員として参加してもらったプレゼンテーションでは、私が最初に考えを明かしてしまうと、皆がなびいてしまうので、何も言わずに「どっちがいい？」と尋ねたら、ほぼ全員が奥村くみシリーズだと。「えっ、そっちなのか」と思いましたが、若手や女性の感性を大切にしようと、奥村くみシリーズを採用しました。そして、そこに私が推した熱血社員の方のエッセンスもちょっとだけ取り入れたCMが出来上がりました(笑い)。

——テレビCMは新卒採用などに効果があると感じられますか？

**奥村氏** CMの効果は大きいですね。(新卒採用で)幅広いエリアの、さまざまな学校からエントリーしてもらえるようになりました。「奥村くみのCMを見て奥村組を志望した」という社員が何人もいます。CMはクスッと笑えるだけではなく、建設業界のイメージを改善し、向上させる内容とすることも重視しています。2024年に制作したCMでは、業界団体や国土交通省が建設業界のイメージアップ



入社時に同期生たちと撮影した懐かしい一枚。中段の左から4人目が奥村氏



に向けて掲げるキャッチフレーズ「新3K+K」\*を取り上げましたし、最新作では、女性の活躍と男性の育休取得をテーマにしています。

※建設業界では、『給与が良い』『休暇がとれる』『希望がもてる』の新3Kに『かっこいい』を加えた『新3K+K』の実現を目指している。

《座右の銘は「腹が立ったら明日怒れ」。翌日になってもまだ腹が立つようなこと以外は些細なことだから怒る必要はないという意味だという。創業者である曾祖父の言葉を、奥村氏は母親を介して耳にした。「ぐっところえろ」という戒めとして、胸に留めている》

—— 創業家の社長として気をつけていることはありますか

**奥村氏** 裸の王様にならないことです。できるだけ皆の声を聞くように、ちゃんと服を着ているかなと、確認しながらやらなければいけないと思っています。

—— いつも心がけていることや、モットーをお聞かせください

**奥村氏** 「腹が立ったら明日怒れ」。これは創業者で曾祖父の奥村太平が常日頃、口にしていたといわれる言葉です。「腹が立って、明日になってもなお収まらないようなことであれば怒りなさい。それ以外のことは小さいことだから怒る必要はない」という意味で、カッとんでも、いったんはぐっところえろという戒めなんです。私が小学6年生のときに亡くなった曾祖父から直接言われたことはなかったのですが、母親から「ひいじいちゃん是这样ってたんよ」と聞かされて、ずっと自分への戒めの言葉としています。どちらかという、カッとなりやすい方なので常に座右の銘とし

て意識しているんですけど、なかなか実践するのは難しいですね。

——趣味はマラソンと伺いました。どういった経緯、理由で走ることに熱中するようになったのですか

**奥村氏** あるとき、役員の健康管理を役員全員の了解を得て社長室で担当することにしたのですが、その頃の私は余裕が良すぎて、健康診断の数値も芳しくなかった。社長室で管理するのに、私自身が不健康では示しがつかないと一念発起し、ある程度食事制限をするとともに、消費カロリーを高めるためにランニングを始めました。ランニングの癖がついた頃に、高校時代のバレーボール部の仲間が奈良県で行われる10キロの大会に誘ってくれて、出場すると結構速いタイムで走れた。それが45歳の時。そこからどんどん距離を延ばして、48歳で初めて挑戦したフルマラソン（北海道マラソン）は3時間半で完走しました。こうなると走ることが面白くなって、計20回フルマラソンに出場しました。今はもう大会に出るのはやめましたけれど、毎日のランニングは続けています。今朝も5キロくらい走ってきましたよ。

——マラソンと建設業の類似性について、以前に出演したラジオ番組で語られていました

**奥村氏** マラソンはスタートからゴールまで、それだけで



後樂園キャンパス新1号館の外観

はないんです。日頃の練習、トレーニング。トレーニングにもサポート体制があって、レース本番に挑む。レース中もいろいろな人に応援してもらいながら42.195キロを走り切ってゴールがあります。ゴールしたら、また次のレースに備えて、さまざまな改善項目などを加えて練習を始めます。建設の仕事もいろいろな準備があって、発注者の皆さんや設計事務所の方などのサポートがあって、着工に漕ぎ着ける。工事中にも、いろいろな応援やサポートがあって竣工を迎えることができる。竣工したら、その経験から改善点などを見つけて、次はもっと良い仕事ができるよう努力する。マラソンと建設業には類似性があるなど感じているんです。

《今回インタビューを行ったラウンジのある後樂園キャンパス新1号館（2025年1月竣工）は競争入札で受注した奥村組の施工である。新1号館は奥村氏が主に学んだ旧2号館跡に建ち、CMの「新3K+K篇」の一部は新1号館の工事現場で撮影された。インタビューでは、母校の中大生へのメッセージ、中央大学への期待についても尋ねた》

### 新1号館建設に「うれしさとプレッシャー」 中大生の真面目さ、社会で必ず生きる

——今インタビューを行っている新1号館は奥村組が建設を担ったと伺いました。受注が決まったときの思いを教えてください

**奥村氏** 数社の競争見積もりを経て、当社が受注させていただきました。うれしいという気持ち以上に、ミスは許されないという大きなプレッシャーを感じました。「母校に錦を飾らせていただける」という形になったので、とにかくしっかりと、きっちりと仕事をしよう、お納めしようという思いでした。建物の特長としてはまず、外観、躯体そのものがちょっと変わった形になっています。少し波打ったウェーブがかかったような意外性に加え、さまざまな角度をつけたルーバー（羽板）がランダムに配置されている。そういう外観なので、見るタイミングや位置などで、見え方



奥村太加典氏

おくむら・たかのり。1962年、奈良県香芝市出身。1986年中央大学理工学部土木工学科（現都市環境学科）卒。同年奥村組入社、94年取締役関西支社次長、95年取締役東京支社営業部長、2001年常務取締役営業担当、同年代表取締役社長（当時39歳）。2008～12年と2015～19年大阪建設業協会会長、2020～24年全国建設業協会会長。母校の奈良県立欽陵高校では、高市早苗首相の1学年後輩。当時は面識がなかったが、奥村氏の姉、珠巳さんと高市首相は同級生で、高市首相からは「たまちゃんの弟」と呼ばれているという。

が全然違うんです。変化や多様性などが表された意匠とっていいと思います。建物内部は大きな吹き抜けと回廊があって、回廊のいろいろな場所に学生の皆さんが集うことができる椅子、テーブルが配置されている。吹き抜けに面した場所のカウンターにはパソコン、タブレットなどを置いて、立ったままで相談や会話ができる。授業以外でのコミュニケーションにも十分配慮された構造になっていると思います。大きな吹き抜けですから、トップから自然光が入ってくる。まさに「中央から世界へ」つながるデザインだろうと思います。非常に凝っているんで、造る方は大変でした（笑い）。私も何度か建設中の現場に足を運びましたよ。

——卒業生として、母校の中央大学に期待するところはありませんか

**奥村氏** 中央大学は割と地味じゃないですか（笑い）。他大学に、中央大学は中身で全然負けていない、優っていると

ころも多いのに、あまり知ってもらえていないことに悔しい思いをしています。いろいろな情報発信を強くしてもらって、良い意味で目立つことが必要だと思うんですね。現状は関東エリア、それも通学できるエリアの学生が非常に多い。そうではなくて、もう一回、“全国区”になってくれることを期待しています。

——ご多忙な毎日の中で、中央大学のことを意識することはありますか。また、後輩の中大生にエール、メッセージをお願いします

**奥村氏** いろいろな場所、場面で大学の先輩、また後輩と接する機会があるので、自然と意識します。「私は中央大学の卒業です」と言われれば、「おう、おう、おう」という（歓迎する）感じになりますからね。私自身、迷い道に入ったり、つまずいたり的人生を歩んでいますが、学生の皆さんに言いたいことは、つまずくというのは決して悪いことではなく、迷うのも悪くないということです。その迷いの中から、何らかのきっかけで道を見つけて歩んでくれたらいいんだ、というふうに思っています。全く迷いなく卒業する人も大勢いると思うんですけど、社会に出てから迷うこともあると思うんですね。私は「いや、迷って当たり前だよ。今まで迷わなかったのがおかしい」という思いで受け止めてくれたらいいのではないかと思います。中大生は基本、真面目な気質を持っているでしょう。その真面目さはとても重要です。社会でも必ず生きる資質ですから、社会に出ても頑張れば何でもできる。そういう自信を持って羽ばたいてほしいと思います。

——迷い道からの出口、迷いの中から糸口を見つけるヒントを教えてください

**奥村氏** 私が北海道の牧場に行ったように、現在地から離れてみたらいいと思います。本当に迷っているところの近くにいたら、解決策がなかなか見つからないこともある。思い切ってちょっと離れてみると、物事が客観的に見えてきて、道が見えてくる。そういうこともあるのではないのでしょうか。



奥村社長（前列中央）を囲んで学生記者と放送研究会のメンバーたち